

みんなの農業

農作業メモ 水稲収穫後の水田管理について

四日市グリーンセンター南部事業所 古市

この記事に関するお問い合わせは、
宮農指導課(☎059・3933・3620)まで。
資材についてのお問い合わせは、最寄りの各宮農(総合)センターまで。



翌年に良質な米を栽培するためには、稲刈り後からの適切な準備が重要です。

作業を早めに行うことで、品質向上のほか、災害のリスク軽減や害虫の発生防止にもつながります。

稲刈り後は一段落しがちですが、次作に向けて早めの作業を意識しましょう。

収穫後の田起こし

水稲の収穫後に稲わらを鋤き込むことで、珪酸や窒素、有機物を水田に補給することができます。土壌中の微生物は高温時に活動が活発になるため、稲わらの分解も早く進みます。分解が不十分なままでは、硫化水素やメタンガスが発生し、稲の生育に悪影響を及ぼすおそれがあります。そのため、収穫後はなるべく早めに田起こしを行います。

こしを行いましょう。田起こしが遅れると、田植えの時期にガスが発生しやすくなります。

稲わらの分解には酸素が必要です。一度目の田起こしは、5〜10cm程度で浅めに行い、酸素の供給を意識しましょう。また、分解しきれなかった稲わらは代掻き時に浮き上がり、端に寄って田植え後の苗の生育を妨げたり、大雨の際に水路へ流出し詰まりの原因となったりすることもあります。秋の田起こしは、これらのリスクへの対策にもなります。

なお、田起こしが遅れてしまった場合には、石灰窒素を散布することで分解を促進できますので、必要に応じて活用しましょう。

秋の土壌改良材の散布

酸度の矯正を兼ねて、珪酸分や鉄分を含む土壌改良資材を投入しましょう。

珪酸分を施用することで、高温ストレスへの耐性、倒伏の軽減、耐病性の向上、光合成の促進、さらには食味の向上など、さまざまな効果が期待できます。鉄分については、ガスの発生を抑え、根張りをよくすることで耐暑性の向上に寄与します。

みえきた管内の圃場の多くは珪酸が不足しています。土壌診断を実施し、その結果に基づいて適正量を散布することをおすすめします。

畦草の管理

近年、イネカメムシやミナミアオカメムシといった大型のカメムシによる被害が増加しています。これらのカメムシは、稲刈り後も畦畔や本田で繁殖・生息し、越冬個体が増えることで、翌年の大量発生につながります。

カメムシの棲み処となる畦草をできるだけ取り除くためにも、除草作業を丁寧に行うことが重要です。

ジャンボタニシ対策

ジャンボタニシは土の中で越冬します。発生を抑えるためには、収穫後と1〜2月の計2回の耕耘が有効です。

収穫後の耕耘では、ジャンボタニシが地表から6cmまでに生息しているため、車速をゆつくりにし、ロータリーの回転を速く設定すること、殻をしっかりと粉砕することができま。

1〜2月の耕耘では、通常のトラクター設定で作業するだけでも、寒さによって越冬個体の数を減らす効果が期待できます。

